

文語日誌(平成二十五年九月六日)

SALLE GAVÉAU(サル・ガヴオー)

客席少な目の愛らしきホールにて聲樂、ピアノのリサイタルに適す。ロン・テイボーコンクールの會場として夙に有名なり。

シーズン九〇・九一年

SCHREIER(シュライヤー)(九〇年九月)

ペーター・シュライヤーのテノールによる「冬の旅」のリサイタルなり。東歐民主化の餘波を受けたるか、稍やつれて見えし。第十五曲「鴉」にて態とKの子音を汚く發音せり。

COTRUBAS(コトルバス)(九〇年一二月)

ルーミア出身の名ソプラノ、イレーアナ・コトルバスの引退リサイタル。前半はリストとマルクスの歌曲なり。聞き進むにつれて聲徐々に出づ。後半は、ドビュッシー「放蕩息子」、「ボエーム」より第三幕のミニミの別れ、「タイス」よりのアリアと充實。アンコールは「ボエーム」第一幕のアリア「我が名はミニミ」。思はず貫泣きをす。ピンクの服に身を包み、ステージマナーは優雅なり。

BERGANZA(ベルガンザ)(九一年三月)

スペインの誇る往年のメゾ・ソプラノ、テレサ・ベルガンザの巴里に於ける人氣は凄まじく、漸うストラポンタン(補助椅子)の切符を入手せり。而も一番高き席と同額の三五〇フランなり。前半は、ハイドン、モーツァルト、レスピーギの作品。然るに前半のみにて調子悪しとのことにて呆氣なく演奏會は終了す。金返せといふ客も無く、皆素直に歸りぬ。

GASDIA(ガスディア)(九一年三月)

伊太利のソプラノ、チェチーリア・ガスディアのリサイタル。前半はサンサーンスとドビュッシーの歌曲を樂譜を見つつ歌ふのみ。後半は、ロッシーニの歌曲、「カルメン」、「トスカ」よりのアリア。アンコールの終はり二つ、蝶々夫人のアリアと椿姫より別れのアリア、印象に残れり。

RICCIARELLI(リッチャレッリ)(九一年四月)

伊太利のソプラノ、カーティア・リッチャレッリのリサイタル。元のプログラムはほんの慣らし運轉に過ぎず。「イデアーレ」に始まるアンコールは何と十一曲(オペラアリア五曲を含む!)にも及べり。欧州女性の疲れを知らぬ活力には只々驚くのみ。

VANDAM(ファン・ダム)(九一年四月)

ベルギー出身の名バリトン、ホセ・ファン・ダムによるシューベルトの「冬の旅」。ガヴオーの演奏會のうちにては最も混み、舞臺上に三列の客席用椅子、特別に並べらる。密度濃き歌、苦惱の表情など、中年女性客達はオペラグラスを一齊に使ふ。ファンダム氏、第四、八、十六曲にては赤き小冊子の歌詞カードをちらと見つつ歌ふ。

CABALLE(カバリエ)(九一年五月)

待望のスペインの大歌手モンセラット・カバリエ、舞臺に出て来るのみにて拍手鳴り止まず。老眼鏡を掛け楽譜を見つつ歌ふ。貫祿は十分。黒い服といふより布地に近し。アンコールはスペイン歌曲のあとに得意の「アドリアナ・ルクヴルール」よりのアリア。別格の歌手との印象。

シーズン九一・九二年

FASSBAENDER(ファスベンダー)(九一年十月)

獨逸のメゾ、ブリギッテ・ファスベンダー。ベルクの「最後の歌」やマーラーの「さすらふ若人の歌」など。アンコールは英語のグッドナイトといふ知られざる曲。

BAER(ベーア)(九一年十月)

獨逸のバリトン、オラフ・ベーアの獨逸歌曲。アンコールはシュトラウスを四曲、最後はお決まりの「献身」なり。やや素朴にて知的雰圍氣はなし。

LOS ANGELES(デ・ロスアンヘレス)(九一年十一月)

スペインの往年の名ソプラノ、ヴィクトリア・デ・ロスアンヘレス。一九二三年生まれ故、聞き納めか。後半のファリヤ良し。アンコールの「カルメン」よりのセギディーリヤにては萬雷の拍手を受く。

CABALLE(カバリエ)(九二年一月)

再びのカバリエ。ロッシーニ「アルミீダ」のアリアは壓巻なりき。金色の縁の附きたる服なりき。

FRENI(フレニー)(九二年六月)

伊太利の名ソプラノ、ミレッラ・フレニー。紫赤緑黄色と信號の如き服。冒頭のロッシーニにては小さき聲かと思はするも、次第に迫力増し、前半の「ドンカルロ」よりの十分を超える長大なるアリア、後半の「エフゲニオネーギン」よりの手紙の場は共に見事なる出来栄えなり。アンコールは、ミミ、マノン・レスコー、そしてアドリアーナと續く。

シーズン九二・九三年

SCOTTIO(スコット)(九二年十月)

伊太利の誇る大プリマドンナ、レナータ・スコット。昔一年間に二十キロも痩せたる故、今は小柄にて綺麗。光る服。演技派、歌に緊張感あり。大歌手の本領を遺憾なく發揮せり。ベツリーニの歌曲や「ルシッド」よりのアリアなど。アンコールは、プッチーニの歌曲、佛蘭西歌曲(言葉を忘れやり直すは愛嬌)、ウエストサイドよりトウナイト。舞臺の上より客にキスしサインするなどサービス過剰の感こそあれ。

FLOWRIGHT(フロウライト)(九二年十二月)

英國のソプラノ、ロザリンド・フロウライト。やや大味なる歌、小ホールの歌曲には不向き。アンコールにて佛蘭西語歌曲の歌詞を間違へ舌を出す。

JONES(ジョーンズ)(九三年五月)

ウエルズ出身の大ソプラノ、ギネス・ジョーンズ。前半はワーグナー「ヴェーゼンドルクの歌」に始まる。シベリウスの歌曲はすべて瑞典語の懐かしき曲ばかりなり。後半はシュトラウス歌曲。彼女の聴衆を引き込む力、尋常には非ず。アンコールもすべてシュトラウスにて、最後は四つの最後の歌より「眠りにつく時」(ヘッセ詩)。欧州の黄昏を感じさせる曲、巴里を去る前に聴くに相應しと覺ゆ。

あとがき

筆者は九〇年六月より約三年間巴里に駐在し、可能な限り數多くのオペラに接する様努めたり。本編はその取り留めもなき印象記、備忘録なり。オペラの魅力につきて語り出せば盡くるけれど、一言にして言はば、オペラには古き佳き時代の欧州の「ゆとりと豊かさ」集約的に現れりと覺ゆ。現代の日本社會に缺くる眞のゆとりと豊かさ、此處にはふんだんに有り。巴里にて見たるオペラ公演の中にて一番印象に残るは、私事に互るも、なほ九三年四月の家の内のコンサート(プーランク作曲のモノオペラ「人間の聲」、於・ミシユラン邸)といふことになるらむ。